

講義の内容は「義記」に従はれた所が多く、それを比較的現代の語を以て繰過せられた観がある、到る所「若し信の下の解釋を深く味はずに、前の教理だけを以て直ちに信の對象とするならば、それは全く知解の分齋に止まつて了つて、眞の宗教的信念には遂に到達し得ないことになる」との著者の態度が現はれ、随つて本書は「大乘起信論」の研究的講義と言ふよりも、寧ろ「大乘起信」を講演せられたものだと言ふ方穩當である様に思はれ、佛教一般初學者に之によりて便宜な著述であると思ふ。

別冊講本用「兩譯對照大乘起信論」は本文のみの新舊兩譯對照であつて、「讀者は之によりて何物にも煩はされず自由に本文の意味を思索し理解し」現代的研究に依りて「新らしき意義の上に更により深き眞理の顯彰せられんことを」著者と共に私共は期待するのである。

京都法藏館發行、菊版三六四頁、定價壹圓五十錢、別冊七十三頁定價五十錢、(本田義英)

民本主義の教育

デューイ原著
田制佐重解説

本書はデューイ氏の Democracy and Education を解説したものである。デューイ氏は米國第一流の學者であつて殊に其教育論は内外の思想界に重きをなして居るのであるが、今回其賜暇を利用して東京帝國大學の招聘に應じ數日の中に來朝の筈である。此時に當り先年キング氏の社會教育に關する書を日本の學界に紹介して成功せる新進思想家田制氏の筆によりてデューイ氏の近業「民本主義と教育」が我學界に邦文によりて紹介される、といふことは頗

る時宜に適應するものといふべきである。

本書は解説者の序及緒言を以て初まり原著二十六章が懇切明瞭に解説されてある。蓋しデューイ氏は其實用主義の思想に基き思考を以て統一的经验の不斷の改造不斷の再構成の方便又は機關と見做し、進化的、經驗的、殊に社會的である所に其教育思想の特色を發揮して居るのである。其所謂民本主義も解説者の序文に於て説かれてあるが如く孤立的個人主義の色彩を有せずして社會的民本主義の立場に立つて居る、氏が千八百九十六年より千九百〇三年迄シカゴの教育大學の附屬學校に於て試みたる手工教育もまさに氏の方便的、進化的、經驗的、社會的の實用主義の實踐であつたのである。教育上先驗的な理想主義的な考方は實用主義の思想や其思想の實踐によりて俄かに征服せらるべきものではないけれども殊に其社會的見地の影響に就ては悔ることが出来ないものが存するのである。吾人は氏が「社會と學校」其他の教育書に満足せずして本書に於て更らに一層徹底した一層組織的な思想を發表せるを喜び、此を邦文にて本邦に紹介せる田制氏の苦心と勞力に對し感謝せざるを得ないのである。東京、隆文館、定價二圓五十錢(一月廿七日小西重直)

寄贈雜誌

哲學雜誌、丁酉倫理講演集、心理研究、東洋哲學、六合雜誌、東亞之光、無盡燈、六條學報、早稻田文學、學校教育、國民教育、教育學術界、教育界、教育研究、中等教育、教育時論、東京教育、